

## 自分の言葉で語る責任

宮崎市立赤江中学校 3年 いわ 崎 のん  
岩 崎 穩

原爆ドーム・広島平和記念館に、私は、6回訪れた。毎回訪れるたびに、展示される資料に変化がある。さまざまな方の体験や遺品にふれる度に、私の平和に対する興味・関心は高められてきた。しかし、現在、戦後81年経ち、「戦争の記憶の風化」が問題だ。興味があるとはいえ、私自身、平和について語る機会は少ない。宮崎市でも、「戦後80年・被ばく80年平和祈念資料展」など県内各地で平和について考える活動が行われている。にも関わらず、来客数はさほど多くない印象だった。ましてや私たち中学生がどれほど足を運んだのだろう。

私の思いを家族が汲み、父方の祖母と曾祖母が、太平洋戦争の話をしてくれたことがあった。特に、祖母の話を鮮明に覚えている。というのは、1945年8月6日の朝、山口県に住んでいた曾祖母は、いつも通り畑仕事をしていた。すると、轟音と共に地面が揺れた。それが地震ではなく、広島で原子爆弾が落とされた音だったというのだ。

この話を聞いて、県を越えても届いた衝撃を、想像していなかった。私は、さらに、話を聞こうとしたが、横で聞いていた祖父に、「戦争の記憶というものは、みんな忘れてしまいたい程辛く、掘り起こしたくないものなんだ。あまりしつこく聞いてはいけないよ。」と言われ、私は潔く諦めた。

祖母も直接戦争を経験していないものの、戦後の貧しく苦しい時代を生き抜いている。そのような辛い記憶を話してくれた二人に本当に感謝している。私は、話したことを「語りの資料」として大切にしたい。

その裏で、二人の話を聞いて、本当に「恐ろしい」と感じ切れていない自分がいることに気づいた。それは、今の生活に戦争の可能性の要素を感じていないからではないか。つまり、令和に生きる私は、戦争の当事者意識が極めて薄いということなのだ。

私は将来、教師になりたい。この夢をもち始めたきっかけは、父である。私の父は、中学校の国語の先生として、朝早くから家を出て、生徒と一生懸命向き合い、一家の大黒柱として、家族を支える自慢の父だ。私の家では、可能な限り、家族そろって夕食を食べる。だから、父の学校での話を家族で聞いているうちに、小学校低学年の頃には、「教師になる」という夢をもっていた。「教師という仕事は、確かに辛いことがたくさんあるけれど、子どもたちの成長を間近で見ることのできる良い仕事だよ。」そう父に教えてもらった。それから今まで思いはぶれずにいる。

また、宮崎県教育委員会では「ひなたドリームカフェ」という宮崎県の小中高の先生方が、将来教師になりたい中高生に話をしてくれるというイベントが度々開かれている。私も何度か参加した。どの先生方も楽しそうに教師の魅力を語ってくださる。父、そして、これまで関わってくださっている身近な先生方を見て、さらに教師になりたいという気持ちを強くした。

実体験に基づく言葉には説得力がある。だからこそ私は影響されたのだ。戦争を経験していない私は、平和について、どれほど語ることができるのか。夢を語ることはできるのか。当事者意識の低い私が、将来の教え子たちの心を動かすことができるのだろうか。課題を受け止めた上で、乗り越える努力をしていこう。私の人生をしっかりと言葉にしながら、よりよい言葉を吟味していくことをこれからの私に課していきたい。